

【緑地を楽しむ本】

『山に肉をとりに行く』

写真・文 田口 茂男 岩崎書店 2012年



『肉』とは天然鳥獣のこと。それは、食料であり、お金でもある。」

著者は、東京で生まれ育ち、今は岐阜県郡上市明宝に住み、フリーランスの職業自然写真家ではあるけれど、狩猟を本格的にはじめて十数年という人です。雪がつもりはじめる季節から始まり、地元で生まれ育った猟師の、70代の原さんと50代後半の和田さんと筆者との会話形式で進みます。

「巻き狩り」の様子がその場にいるかのように、すすんでいきます。雪に残された足跡から、その個体の大きさや 今どのあたりにいるかを推測し、また、ひずめの方向や地形等から、自分たちが狩りをしやすい場所に追い込めるかを考えてゆきます。獲物がここにいると見定めて、犬をどの方向

からけしかけ、しとめる人はどこで待つか・・・。狩猟がこんなに計算されているものとは知りませんでした。

春には田植え・スギの伐採などの山しごとをし、夏には出荷用のトマト栽培、牛の飼育もし、秋にはまた猟のわなをしかける・・・。 けっしてラクとは言えない暮らしですが、今の自分の生活とはかけはなれた、山と濃厚につながっている暮らしに心が釘付けになります。

子どもたちに、こういう暮らし方もあるのだと伝えたくなる本です。この本の最後に、狩猟で獲れた肉を買い取るお店の解説があり、通販もしているとあったので、我が家の社会人の娘が「不定期で入る肉をどうやって売るんだろう？」とインターネットで検索しましたが、ホームページはなく精肉店としての情報だけが載っていました。電話で応相談ということでしょうか。

(遠藤)